

火浣布畧説

全

特別
二 4
3324



火浣布略說序



火浣布之名。文雅。其傳也
尚矣。嘗云。生。物。如。禱。大。難。
得。也。說。者。或。以。為。鳥。毛。之。譚。
頃。始。造。火。浣。石。替。採。蓋
物。品。講。究。之。好。編。年。一。樣。軸。裁。

制之巧。為紹克獲。為令俾親。而
而在。將無有典。終々。彼亦見
乃鳩溪之不朽。而心。心。情。曜。お
一時。者。已。乎。以。和。乙。爾。秋
六月。桂。川。國。訓。序



火浣布略説

讃岐 鳩溪平賀國倫 編輯

武藏 門人 中島貞叔 全校

中島永貞

火浣布。又火毳。もいふ。浣乃字澣の字の音なり。物と濯しとぬぐ。此布穢多しぬぐ火に入て焼く。垢を悉く焼落て布は少も損せぬ。左に火を以て浣が。烈々。火。乃。中。入。又。油。を。以。て。燃。せ。ば。墨。油。も。燃。く。布。の。糲。を。と。れ。唐。土。も。至。て。得。が。る。寶。と

周書しゅうしょに載のと。西域せいやく火浣布かゑんぷと獻けんと。汚けがるまじは
則すなはち火浣かゑんの潔けつし。列子れつし曰い西戎せいじゆう周しゅうの穆王ぼくわうは火浣かゑん乃
布ふと獻けんと。是これを浣あらふ必かならず火かを投なぐ。布ふ則すなはち火色かいろ。垢あか
則すなはち布色ふいろ。火かをと出だしてあま火か旅りょへ、皓然こうぜんとして
雪ゆきれ。東方とうほう朔しやくが神異しんい經きやう曰い南荒なんかう乃すなはち外火山がいふしやん
あり。長なが三十里さんじゅうり廣ひろ五十里ごじゅうり。其中そのちゆう皆みな不燼ふせん木ぼくと生なじ。
晝ひる夜よ火燒かや。暴風ぼうふう猛雨まううも滅めつど。火中かちゆう鼠ねずみあり重おもさ
百斤ひゃくしん。毛けの長なが二尺にせき餘あま。細こく絲いと乃すなはちことし。是これを以もて
布ふを作つくる。常つねに火中かちゆうに居ゐる色いろ赤あかし。火かを
外ぐわいに出だすと色いろ白しろし。水みづを以もてあま火か沃そくば即すなはち死しと。

其毛そのけと織をて布ふとし。火浣布かゑんぷと號なづく。抱朴子ほうぼくし曰い曰
南海なんかいの中ちゆう蕭丘しやうきゆう乃すなはち上かみ自生じゆうじゆうする火かあり。常つねくく春はる
起おこて秋滅あきめつ。この丘きゆう上かみ一種いっしゆうの木ぼくと生なじ。火起かおこると
あま火かのこ木ぼく小こく焦こげて黒くろし。夷人いじん此木このぼくの華はなと取とりて
火浣布かゑんぷとし。木ぼくの皮かわも亦また剥むぐ灰はいを以もて煮にて布ふ
とし。但たゞ華はなの細こく好このく及およぶ。又また白鼠しろねずみあり
大おほなるもの數斤すうしん。毛けの長なが三寸さんすん。空木くうぼく中ちゆうに居ゐる。火か
入いて焦こげまじ。その毛けも亦また績つひて布ふとを登のぼす。其餘そのあま
搜神記しゆうしんき。後漢書こうかんしよ梁冀傳りやうけいでん。同どう西域傳せいやくでん。三國志さんこくし齊王せいわう紀き。
束皙すくせきが發蒙記はつもうき。梁四公記りやうしこうき。任昉じんぱうが述異記じゆついき。譙周せうしゆうが

火浣布

異物志。張華が博物志。范泓が典籍便覽。高濂
 が遵生八牋。李時珍が本草綱目等の書に出る。
 又後漢の桓帝れん。大將軍梁冀火浣布を以て
 單衣とす。嘗て大賓客と會む。冀佯て酒を
 爭ひ。杯と失して單衣を汚し。偽怒て衣を解て
 ちまひを燒。布火を得て燃て灰の如し。垢盡火滅
 ちまひ潔然として潔白。灰汁を以て洗ふがごとし
 と。ひも後漢書。傅子紀略等に出る。漢の代は
 西域より獻するも亦もあつた。中以後久しく絶て
 けり。ひもすかればゆゑ。魏の初に至る。時の人火

浣布といふを名づけて。無とのなりんと疑へ。
 魏文帝以爲。火の性酷烈にして含生の氣なし。
 火よ入て燒さる物あらんやと。遂に典論を著して無
 しと決まりをいふ。明帝の代に至る。三公に詔して
 曰。先帝昔典論を著す。不朽の格言なり。大學
 石經と並に永く來世に示べしとて。石小をさぐんで
 廟門の外に立。志るに齊王の青龍二年。西域譯
 と重て火浣布を獻す。大將軍太尉詔して。燒
 試て百寮に示す。於是の乃典論を刊滅す。天下
 是を笑ふ。又晉乃泰康二年。大秦國より火浣布と

獻（せじ）。殷（いん）臣（しん）奇布賦（きふのふ）を作て曰（い）。乃採（さい）乃析（せき）。是紡（ほう）是績（せき）。每以爲布（まい）。不盈數尺（ふえい）。以爲布帛（ふのび）。右諸書（みぎしよしよ）に出る中。梁冀（りやうけい）が單衣（さんい）とせしと。晋（しん）の代（しろ）は布帛（ふのび）とせし外（ほか）。其布（そのふ）の大さともあるさ。多（おほ）ハ紙上（しじやう）の空論（くうろん）とある。目のあつらへりつらりとつらつらと説（せ）たり。此物（このもの）唐（たう）土（ど）とてハ織（お）つてハ毛（け）とび。只西域（しよきやく）より希（まれ）にあらるるといふ。唐（たう）人もあらはして。或（ある）ハ火山（くわんざん）蕭丘（せうきう）の火鼠（かそ）の毛（け）。まじり木（き）の華（は）。或（ある）ハ木の皮（かわ）等（ら）ち織（お）つるものとつふ。大なる誤（ご）也（なり）。蕭丘（せうきう）火山（くわんざん）火ありて常（つね）に白（しろ）きども。是（こゝ）ハ即（すなは）陰火（いんか）又寒火（かんか）ともいひて。常（つね）の火（か）を

あつと物（もの）を燒（や）火（か）よハあつは。抱朴子（ほうぼくし）曰（い）。蕭丘（せうきう）は自然（じぜん）乃火（か）あり。一種（いっしゆ）の木（き）と生（な）して小（こ）く焦（や）て黒（くろ）く。陸游（りくゆう）曰（い）。火山（くわんざん）軍（ぐん）其地（そのち）鋤（ち）耜（し）て深（ふか）く入（い）る。烈焰（れんえん）ありて種（たね）植（うゑ）と妨（さまた）はく。按（お）するに我邦（われがくに）越後（えつご）妙法寺（めうほふじ）村（むら）より出る火（か）の類（るい）ありて。物（もの）乃燒（や）ざる陰火（いんか）なり。其陰火（いんか）中（ちゆう）に生（な）しつる。鼠（ねずみ）もをらき木（き）にもあり。常（つね）ハ火（か）み入（い）る。とハ燒（や）ざるといふはまれなり。然（しか）を理（こと）せらるる唐（たう）人（にん）ども。火（か）ハ陰陽（いんやう）乃二火（に）あり。事（こと）ハ後（ご）に記（し）す。より火（か）浣布（くわんぷ）ハ外（ほか）ハ一種（いっしゆ）乃物（もの）と以（も）て製（せい）する事（こと）ハあり。さるる。ハ不替（ふか）乃説（せ）をさる。大（おほ）は笑（わら）べきなり。

火浣布賦 又我邦之古より名れけりて。其
 物と見しものもたけゆき。竹採物語も火
 鼠ねずみ乃裘かほろもとて至てたれり。譬たとへとすきを我
 邦もとより其形状かたちと見るものなり。予此物
 織オリ布フとて申出でて。過し申乃さけり。火
 浣カハク布フ創つくて製せいし出を。同一年の三月紅毛人
 東都とうとに來る。官儒青木先生對話たいご乃序と得し
 紅毛人を見せけり。ふ。いびらんやんがらんを。
 書紀へんでれり。でゆるところふ。外科わいしやとるねい
 れす。ほるすところまん。たぐ大おほ驚おどろて曰。此品

紅毛天竺とけり。め世界乃國くみくも織
 法をちりげ。とるところんと。といふ國よむし一
 人ありて織出せり。彼國亂世けりて織傳
 と失へり。故し此物絶て希なり。火浣布乃
 名とらていん語めく。あみやんとす。又あすべす
 とす。ともいひ。らていん語と紅毛國の雅言がげんあり。
 常の紅毛語とす。すていんあす。又あるどふす。と
 とり。と。承知。あつこかうむる。でる。げねいしゑん。さて
 ゆらる。とんでささあ。うといと。一名まきさしとん。とん。
 うといと。といふ紅毛の書よ出せり。大通詞今村

源右衛門。小通詞猶林十右衛門。譯とけとて是
と正せり

とるくらんと。とへ。西域の國乃名なり。凡世界と
呼ばれり。名ろつを。あぢや。あふら。あしとら。と
りよ。とると國へわぢやの西。名ろつをの境あり。と
唐土より數千里西北よりわたり。むろ唐
土へ火浣布と獻し。西域西戎西番
かしく。皆此とると國なり。是等々
國も唐土へ通するも希にして。たまた
通するも。重譯して通詞と通詞とい

さのこれと其詞も通せらる。紅毛人
彼國へとゆ。又我邦へも来るゆ。譯と
かゝるに。至らば。て其事通ざる。今
詳かり。實に太平の餘澤と
つら

○火浣布と云ふ。香敷に作る。遵生
八。燒曰。隔火。銀錢。雲母片。玉片。砂片。俱
可。以火浣布如錢。大者。銀鑲周圍作隔
火。猶難得。又典籍便覽曰。火浣布甚難
得。嘗有如錢。大者。銀鑲周圍。留火上燒

香と云ふ。隔火の我邦の香敷。又銀葉
 とも。專せん雲母うんぼ又銀ぎんなくや作つくままくも。此
 二品ふたつの薄うすくしての物ゆゑ。火の移うつり急いそに
 て香氣かきおどやのたゞ。火浣布かゑんぷの其質しつ軟やわふして
 火氣かき徐ゆる徹ととるゆゑ。香氣かきおどやのたゞ。又雲母
 の數度すうどりらぬるとぬの火かをくぬ。銀ぎんを火かよの
 かりてよろ。この二品一度香かを焼やハ木の脂あぶら焼
 けて落おが。再香またかを焼やハ。初の移香うつかありて。はふ
 らどあ。火浣布かゑんぷの木の脂あぶらけをくぬの火か中
 に入れて焼やハ。脂あぶら少し残のこり焼やおち。幾度いくどりらぬても

移香うつかならぬゆゑ。唐土たうどめての隔火かゑん乃絶品たつてんとする
 かり

○予まが創製さうせいも火浣布かゑんぷの隔火かゑん辱はと
 台覽たいらんと經へその餘あまやんごぬぬおんくくくくも獻けん
 もふ。又唐土たうどまで至寶しほうとして尊うやぶぶくくの諸書しよ
 にかええししれ。試たまは彼國かこくの人ひとに志こころめめさんさんくくんん
 公おみへへ上ありりに。官くわんより仰おほりて長崎ながさきへた
 くの異國いこく人ひとを見みせししべしと。新あらに命いのちと受うく
 隔火かゑん五枚ごまいを製せいしぬ。



水鏡

八



典論と
刊滅の
圖

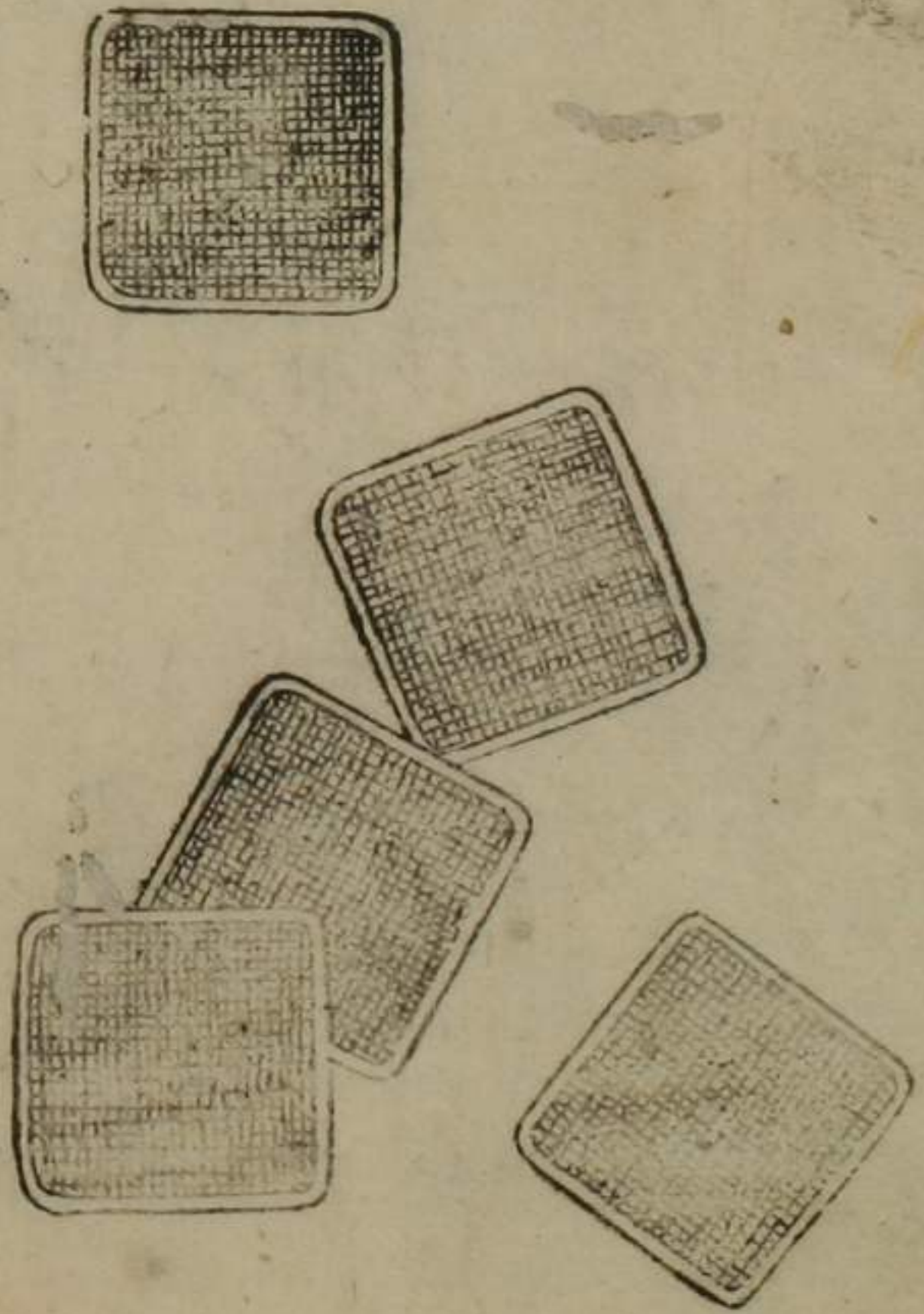
水鏡

八

火浣布隔火乃圖

火浣布隔火包紙の圖

火浣之布自古有名。彼妄造說臆度量。木皮斯調鼠毛南荒。或果誣理謂傳者妄。漳溟造物寧可推窮。陽中有陰陰中有陽。



入火不化。柔能制剛。昔彼西戎。今我

東方。織成素總。適以銀鑲。一片隔火。百炷

觀香書堂。清供繡房。風情。

明和甲申秋八月

大日本讚岐 鳩溪平賀國倫創製



右隔火五枚。 公以奉。十月中旬 官より

長崎一贈。給けふ。十一月下旬長崎より清人の
呈狀来り。 官より寫賜る。

火浣布

清人呈狀乃寫

蒙

賜觀火浣布隔火一事。子等俱已公同領
 觀。但此物從古傳名。近所未觀。今貴
 國有此。名人博綜廣識。秘製精奇。實為
 罕見。筆難盡述。子等幸在崎館。得叨異
 遇。見此奇珍。公同賞嘆。欲通知在唐之
 人。有此異寶。然有空言。若無實據。諒難
 見信。今欲給額數枚。帶回俾在唐博物
 之人。一同賞鑒。為此具單謹

覆

明和元年十一月 日

- 未十番 南京船主 龔子興
- 全十三番 南京船主 項乾升
- 申一番 南京船主 趙可欽
- 全二番 寧波船主 黃恪齋
- 全三番 廣南船主 沉綸溪
- 全四番 南京船主 宋敬亭
- 全五番 南京船主 汪繩武

- 全六番 寧波船主趙紹統
- 全七番 南京船主崔景山
- 全八番 寧波船主唐重華
- 全九番 寧波船主黃世訓顧舒長
- 全十番 寧波船主曹體三
- 全十一番 寧波船主朱秉鑑
- 全十二番 南京船主張雲衢
- 全十三番 寧波船主吳果庭
- 全十四番 南京船主邵詩南

右各有印

右之從文

火浣布之書委涉見之。雖私有一曰。得是信以。品
 古之名。色傳承。以是之終。不及不中。其受。而時右
 通轉。總磨。識之。信方。秘製。有之。以是。實心。若代。之。珍。子
 郭。在。筆。紙。有。每。以。折。能。在。後。涉。茲。下。之。奇。品。致。得。見
 何。貴。亦。步。賞。嘆。仕。以。係。在。唐。之。者。在。如。新。好。愛。有。之
 信。物。價。仕。以。尤。實。信。方。之。云。之。之。信。用。仕。以。及
 多。好。以。付。以。度。一。二。枚。極。然。信。付。度。之。願。以。九。以。之
 唐。之。之。紙。數。者。若。之。後。賞。見。為。仕。度。之。以。仍。以。書。付
 中。上。以。

明和元年十一月

未申諸侯私願於連判

右書付之通和解於上中

林市兵場 何幸次右邊 下

蒙

賜觀火浣布隔火。若能可成後開馬掛衣料尺寸。仰懇准買一件。何者敬等因圖帶面唐山欲作進獻之用。其價值即將六分參匏銀三百兩配買。但此品帶面進獻果中上意。將來再令敬等採進彼

時具單呈懇給配仰懇 恩准所求則感不淺矣。

計開

一馬掛一件

長九尺一寸

闊二尺四寸 係貴國小尺

以上尺寸織成方合進獻之用。如有五寸四方或乙尺四方者。俱不合唐山進獻之用。則不敢領買帶面。

明和元年十一月 日

申四番南京船主宋敬亭

全五番南京船主汪繩武

各有印

右之譯文

船見紅 仰付以火浣布之番委若方書裁仕以子系
羽織寸尺 湯織立おぬり一 志分湯火世下度
草紙以右を和た見と以唐國の持ぬ秋上之仕以子舟
六分葉海流飽銀之貴同と 愛渡中夜事好以子持ぬ
秋上仕首尾能お納再い調進と 命と承ぬ其良以
書付以實と後了上以乃右草紙以湯 研書好

成下以く羽有仕合さ好い

免

一 馬紫羽織

一 志

丈九尺五寸

但之曲尺之候

幅式尺三寸

右寸尺湯織立安仕仕持上におぬり以子
又寸以方又とと尺以方と小切とと上におぬ
不中裁亭之旨以子舟船置候事好

申記番南京船頭宋敬亭

同又番南京船頭汪繩武

明和元年十月

右書付く通和解説上中以下

林市兵部

何幸次郎

按するに清人の火浣布と名づくものありと云ふは左
ものありぬべし事なり。古くも云ふ所あり然れ
寸尺をれを然上と云ふもきども。然れに方一
尺に方の小切して。然上にあるがゆゑを
かといふといふ。まゝもいふ。神異経。搜神記。抱朴子。發蒙記。述異
記。本草綱目の諸説は。まゝいふ。然れ

目れわらえしに。又梁四公記。杰公火浣布三端と云く。木の皮と毛に
て織らるたが。有る。實に。至て妄説にして信ずるに。西域より傳りたりと云ふは。周の代西戎より
獻するに。周書列子小云。次は後漢の梁冀が單衣と云ふもの。三國志齊王
紀に然れありと云ふ。晋の恭康二年に獻したるもの。唐土數千歳より西域よ
り傳りて書籍に記せし以上

梁冀が持しん單衣りれが其狀大なりと云也。
 周の代并に三國乃時後くる物其大さも記
 さび。晋の時獻しる物へゆくるこの大さ也。そま
 くと殷臣奇布の賦と作て是と稱也。又遵生八
 牋。典籍便覽よ。錢の大されど其物と隔火よ
 作る甚得がじと云也。のくおしの切さ人もそを
 すまバ。み寸一尺乃切なりと云。唐土よそそ甚
 そよとびさ事明白なりと云。まうはよ右のどとく
 とふ。高賈と專とする。船主どももあく
 彼國の書籍乃ぬししと云。まうとらうゆえ

か。又の外よ意味も有べと事よやいとつう

○清人の手れ也。幅二尺に寸長九天一寸に出来
 たりんやと。公より清尋あり。倍てまが試ふ幅
 一寸に長に寸三分の物と製して。公にまの。程
 清人乃ぬるゆりてく跡より倍とまよとやとぬ。
 けいめおるりの詳なる事ハ。火院布考に記し
 置ぬまき。まよの其のゆるとまのゆめ

火浣布略記終

題 火浣布

右の詩文章歌發句等出た名は身取大方を
身取大方を以て各卷に分りて集まふに
よりて
被新仕

江戸室町三丁目

須原屋市兵衛

同本石町通三丁目

植村 藤三郎

京寺町通松原下所

梅村 三郎兵衛

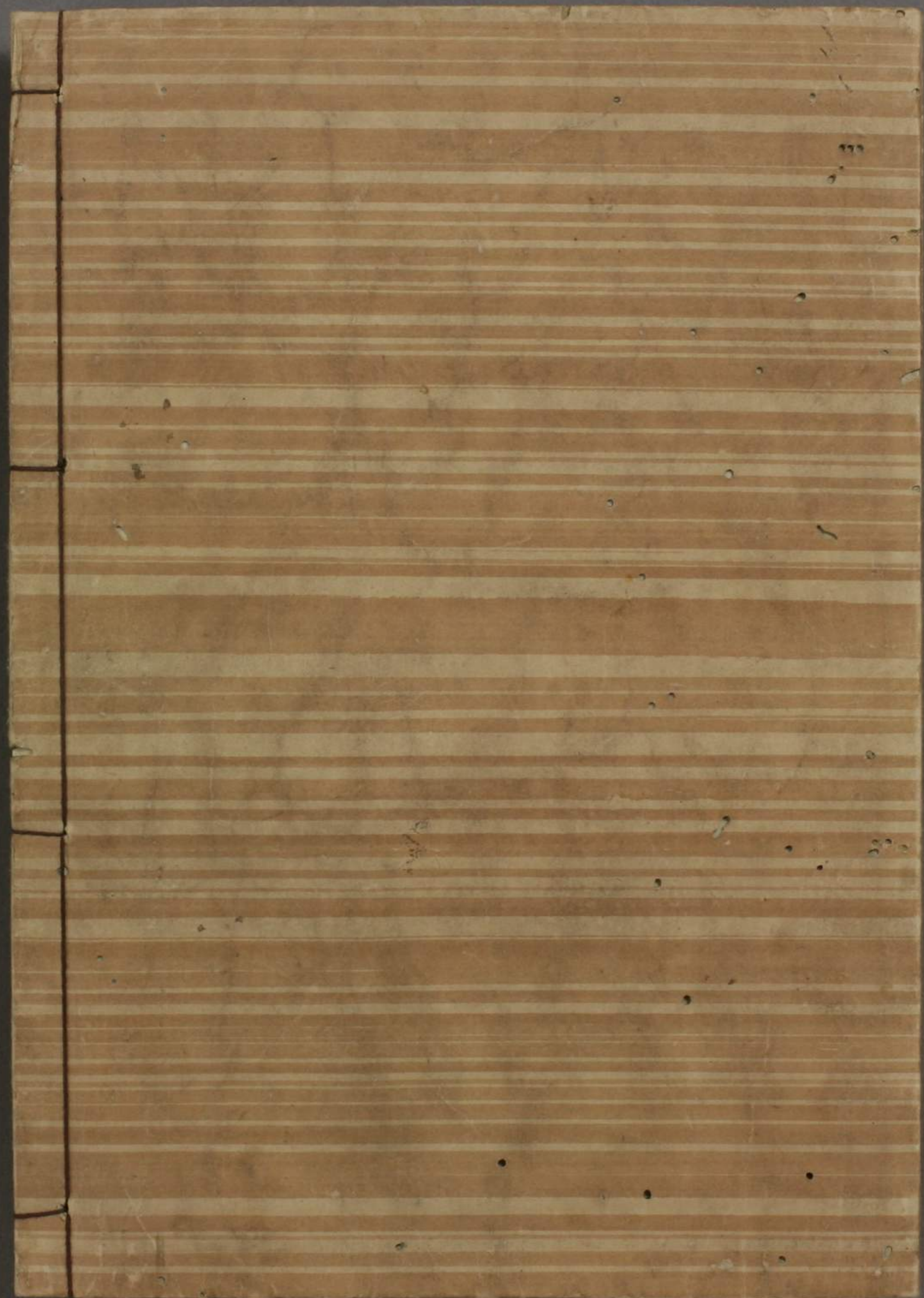
大坂心齋橋須原町

柏原屋清右衛門

書林

三十五

九



本書火浣布異説の曾て海表叢書の
 編纂に際し新村出先生が詳しく解説を
 附し原文を轉載さる蓋し今日稀覯の書な
 る可し

三月十日

